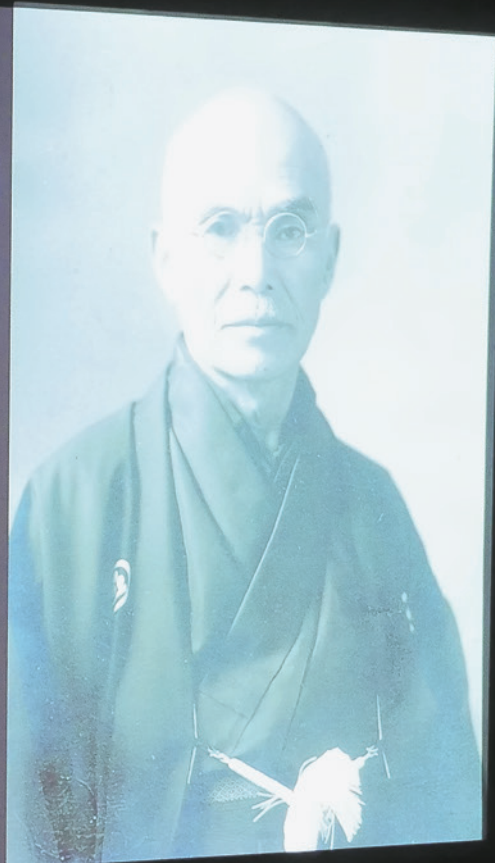


医術は濟生の根本、
良医を養成して新付の
蒼生を慈惠せよ。

創立者
三田俊次郎





岩手医科大学創立120周年記念式典・記念祝賀会を挙



平成29年4月20日(木)、岩手医科大学は創立120周年の記念すべき日を迎え、岩手県民会館、盛岡グランドホテルにおいて創立120周年記念式典並びに祝賀会を挙りました。

当日は、記念式典に来賓、招待者、同窓生、本学教職員、一般の方々 810名、祝賀会には636名の出席を賜り、盛会裏に終了いたしました。ご出席賜りました皆様方には心より御礼申し上げます。

記念式典

岩手県民会館で行われた記念式典は、午後2時、司会を務めるエフエム岩手アナウンサーの鈴木清恵さんの開会の辞で始まり、国歌斉唱に引き続き小川彰理事長が式辞を述べました。その後、ご来賓の松野博一文部科学大臣(代読:常盤豊文部科学省高等教育局長)、達増拓也岩手県知事、寺野彰日本私立医科大学協会会長(学校法人獨協学園理事長)からご祝辞を頂きました。祝電も数多く寄せられ、その中からハーバード大学 John D Da Silva歯学部長、塩崎恭久厚生労働大臣からの祝電が披露されました。続いて小川彰理事長が「岩手医科大学120年の歴史～医療の貧困との壮絶な戦い 地方

が故の苦悩と歩み～」と題し、記念講演を行いました。医療の貧困解消を目指し闘って来た先人の思いを胸に、地方にありながらも日本・世界に発信する大学への発展を目指していくことを講演を通じて伝え、県民・国民の健康を守る防人となって努力することを約束し講演を終えました。

その後、祝賀演奏として岩手医科大学管弦楽団による「ニールンバルクのマイスタージンガー前奏曲」が披露されました。迫力のある演奏の余韻が残る中、最後に管弦楽団の演奏と合唱団による校歌の斉唱が行われ記念式典は閉会となりました。

※小川理事長による記念講演の動画を本学HPに掲載していますのでご覧ください。



小川理事長による記念講演



岩手医科大学管弦楽団による祝賀演奏



本日ここに、文部科学大臣殿、岩手県知事殿をはじめ、各界から多くの来賓各位のご臨席を仰ぎ、岩手医科大学創立120周年の記念式典を挙げてまいりましたことは、本学にとりまして誠に光栄であります。

さて、本学の歴史は「医療の貧困」と「医術は濟生の根本とする理想」との壮絶な戦いでした。と同時に「金銭的貧困」と「国民の生命を守る責務」との戦いでもありました。120年の歴史を繋いでこられたのは奇跡と言って良いでしょう。創立者の理想はもとより各年代でご努力されてきた多くの先人の熱い思いによるものと、心より敬意を表すものであります。

明治の医師養成は、明治20年の勅令により、全国の多くの医学校が廃校となり、その後の地域医療の荒廃は目に余るものであります。特に、北東北・北海道には医育機関は一校のみとなり、多くの住民が病に倒れ、衛生状態の悪化により、トラコーマが蔓延し失明に至るものも数多く、悲惨な状況を呈していました。

それを憂いた創立者の三田俊次郎は、120年前明治30年の今日、私財を投じて私立岩手病院を設立、同時に医学講習所（私立岩手医学校に発展）、産婆看護婦養成所を併設し、「医術は濟生の根本、良医を養成して新附の蒼生を慈恵せよ。」と宣言し、北東北・北海道唯一の医育機関を創設したのです。これが本学の源であります。

その後、歴史の変遷により私立岩手医学校は明治45年一時廃校の憂き目にもあい、存続の危機を迎えました。医療の貧困とこれらの危機と戦い昭和3年には念願の私立岩手医学専門学校の設立を実現させ、医育機関を再興させたのです。本学の学是は「医療人たる前に誠の人間たれ」であります。医療人である前に豊かな人間性、社会性を持った有能な人材を育成するというこの精神は、今日まで脈々と傳承されております。

昭和17年、俊次郎は台北帝国大学総長に就任していた我が国の法医学、血清学の始祖三田定則を、岩手医学専門学校第二代校長に充て、昭和22年には大学への昇格を果たしました。こうして本学は、地域医療に密着した私立医科大学として揺るぎない地位を確立していったのであります。

その後、昭和40年、東北・北海道で初めてとなる歯学部を設置しました。本学は、県都盛岡市の中心、内丸地区にキャンパスを構えてまいりました。しかしながら、施設の老朽化と最先端の教育、医療、研究を行うには狭隘となったため、盛岡市の南方約8キロ郊外の矢巾町に新キャンパスを開設しました。平成19年には薬学部を設置、新時代の薬剤師の育成に努めてまいりました。また、本年には看護学部を新設しました。これにより、将来医師、歯科医師、薬剤師、看護師を目指す学生が学生時代から顔の見える環境で学ぶことが出来る大学を目指しています。



一方、6年前の平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波では、本学は岩手県と連携し、県全体の災害医療活動をリードし全国からの全ての医療チームを把握し、効率よく各避難所に配置するなど、災害時における医療の一元管理のモデルを確立した他、医療チームの派遣等、全職員が一丸となって獅子奮迅の活躍をしたものと自負しております。

震災時には、全国の関係団体及び個人の皆様より、心温まる支援を数多くいただきましたこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第です。

また、本学の歴史の中でも大事業となる、新附属病院の矢巾キャンパス移転は、平成31年秋の開院に向けて建設に着手しました。震災の教訓から外部からのエネルギー供給が途絶えた場合でも、1週間は自力で全ての病院機能の維持が可能なエネルギー供給システムを導入した災害に強い世界にも類のない画期的な病院となります。また、現在地は内丸メディカルセンターとして、外来中心の高規格病院として整備する予定です。

以上のように本学が幾多の存続の危機を乗り越えながらも、ここに120年の歴史を刻むことができましたのは、ひとえに教職員、卒業生、ご父兄はもとより、ここにご参会の方々をはじめ各界の多くの方々のご指導、絶大なるご協力、ご支援の賜であり、重ねて衷心より敬意と感謝を表すものであります。

私ども教職員・学生一同は一丸となって、創立120周年を機に、創立者をはじめ先人たちが築いた建学に当たっての高邁な理想に今一度回帰し、将来に向けて新たな発展を期し輝かしい歴史を創ってゆく所存です。

結びに、本日はご多用のところ、御臨席賜りました数多くの関係の皆様に対し厚く御礼を申し上げますとともに、今後とも倍旧のご指導、ご鞭撻、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。式辞といたします。



岩手医科大学創立120周年にあたり一言お祝いの言葉を申し上げます。

岩手医科大学は明治30年に岩手県の医療の貧困を憂いた三田俊次郎先生により設立された私立岩手病院併設の医学講習所を起源とし、昭和3年の岩手医学専門学校を経て、昭和22年に岩手医科大学となりこの度120周年を迎えられました。

本日ここに創立120周年記念式典が盛大に挙行されますことを心からお喜び申し上げますとともに、今日まで貴学の充実発展にご尽力された歴代の理事長・学長をはじめ、関係の皆様方のたゆみないご努力に対し深く敬意を表します。

岩手医科大学は「誠の人間の育成」を建学の精神とし、一貫して地域医療の発展、及びそれを担う医療人の育成に取り組んでこられました。昭和40年には歯学部を、平成19年には薬学部を、そして平成29年4月から新たに看護学部を加え、医療系総合大学へと着実な発展を遂げられ、先進的で特色ある様々な取り組みを通じて、1万人を超える多くの優秀な医療人を輩出されるとともに、医学・医療の進展、及び地域医療の充実に大きな役割を果たしてこられました。

教育面では、明治30年の私立岩手病院の開設当初より、医師のみならず助産師及び看護師の養成にも取り組み、現在も医学部、歯学部、薬学部及び看護学部4学部が同一キャンパス内で学部の垣根を超えた連携教育を推進するなど、患者を中心として、関連多職種が連携するチーム医療を実践できる人材の養成のため、先進的な取り組みを推進されています。

また、平成25年には、東日本大震災の教訓から、災害時地域医療支援教育センターを開設し、実践的な災害



医療教育による人材育成に尽力されています。

研究面・診療面においても、昭和24年に日本初の角膜移植を行い、後の角膜移植法成立への契機となったほか、未熟児治療における人工サーファクタントの開発実用化、医歯薬総合研究所等における国際的な共同研究など先端的な研究・医療を推進し、世界からも注目される実績を数多く生み出してこられました。

今日我が国においては、少子高齢化の進展、疾病構造の変化など、医療を巡る社会環境の急激な変化に伴い、医学教育研究と医療を担う大学に対する社会の期待が益々高まっています。高度化多様化する社会のニーズに応え、岩手医科大学がこれまでに築かれた伝統と実績をもとに、優れた医療人の養成及び研究の推進、並びに質の高い医療の提供のため、一層の充実発展を遂げられますことを心から期待しております。

結びに、本日ご臨席の関係の皆様方のご支援ご協力に厚く御礼を申し上げますとともに、岩手医科大学の益々のご隆盛を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



岩手医科大学創立120周年記念式典が開催されるにあたりましてお祝いを申し上げます。

岩手医科大学におかれましては、明治維新の余韻冷めやらぬ激動の明治30年の創立以来、この岩手の地において、120年の長きにわたり多くのかけがえのない人材を輩出され、岩手県の医療、我が国の医療、そして世界の医療の発展に寄与されてきたことは、私ども岩手県民の誇りとするところであり、歴代の理事長をはじめ、関係各位のたゆまぬご努力に対し、心から敬意を表します。

近年においては、本県に甚大な被害をもたらした東日本大震災津波に際し、DMAT等の医療支援チームを派遣す



るとともに、全国から派遣された医師の受け入れ調整を行うなど、被災地における医療提供体制の確保に多大なるご支援を頂戴いたしました。昨年8月に発生した台風第10号に伴う災害におきましても、発災後直ちに県災害対策本部や岩泉町などにDMATを派遣され、入院患者の移送や避難所等における医療救護などに、多大なご支援とご協力を頂いたところであり、改めて深く感謝を申し上げます。

県では、復興基本計画の総仕上げとなる平成29年度から30年度までの2年間で、更なる展開への連結期間と位置づけ、台風第10号からの復旧復興とも合わせて、更なる展開に向けた足掛かりをしっかりと築くことができるよう力強く取り組んで参りますので、引き続き復興への一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

また、高齢化の進展等に伴う医療需要の変化に対応し、県では将来の目指すべき医療提供体制を定める岩

手県地域医療構想を昨年3月に策定しました。その実現に向けて、病床機能の分化・連携や医師をはじめとする医療従事者の養成・確保などに県としても重点的に取り組んでいくこととしております。

このような中、本県医療の中核を担うとともに、今年度から新たに看護学部を設置するなど本県唯一の総合医療機関として大きく発展してきている岩手医科大学への期待は益々高まっているところであり、今後も優れた教育や特色ある研究の展開、充実した医療の提供に引き続きご尽力いただきますことを期待いたします。

結びに、現在進められている附属病院の矢巾キャンパスへの移転による新たな展望のもと、岩手医科大学が更なる発展を遂げられますよう期待するとともに、ご参会の皆様のご健康ご活躍を祈念申し上げましてお祝いの言葉といたします。

■ 来賓祝辞 ■

日本私立医科大学協会 会長 寺野 彰 様 (学校法人獨協学園 理事長)



このたび、学校法人岩手医科大学が創立120周年を迎えられ、記念式典が盛大に催されますことを、日本私立医科大学協会を代表いたしまして、心よりお祝い申し上げます。

岩手医科大学は明治30年4月、岩手県の医療の貧困を憂いた創立者三田俊次郎先生が私財を投じて設置された私立岩手病院に併設した医学講習所を起源としておられます。その後、三田先生の医学教育にかける熱い情熱と努力が実り、昭和3年に財団法人岩手医学専門学校が設立認可されております。昭和22年には岩手医科大学へ昇格、岩手県唯一の医科大学として発展して来られました。

「誠の人間の育成」を建学の精神として良医の育成に努めるとともに、私立岩手病院においては相次ぐ飢饉や戦争等で治療費が払えない患者にも無料で治療を行うなど、厚生済民に努めて来られた精神を礎とし、これまで一貫して地域医療の発展及びそれを担う医療人の育成に取り組まれておられます。昭和40年には歯学部、平成19年には薬学部、本年4月からは看護学部を加え、医系4学部を有する我が国を代表する医療系総合大学になりました。

教育面では、明治30年開設の私立岩手病院には、医学講習所に加え、産婆・看護婦養成所も併設し、医師のみならず産婆（助産師）及び看護婦（看護師）の養成を行うなど、現代のチーム医療の概念を120年も前から取り入れておられます。現在も医系4学部が同一キャンパス内にあり、且つ共通した講義・実習棟で他学部の学生と共に学ぶことが出来る体制となっております。このような環境を備えた大学は他に例がなく、患者を中心に関連多職種がチーム医療として連携が求められている現代にあって、学生時代から、学部の垣根を超えた連携の下、チーム医療に触れられることの出来る恵まれた環境を備えておられます。また、連携



教育を推進するため、基礎講座を本邦で初めて学部横断的に統合し、統合基礎講座として改編するなど先進的でユニークな取り組みを実施されておられます。

平成25年4月には、同23年3月11日に発生した東日本大震災の教訓を生かされ、全国に発信できる災害時地域医療体制モデルの確立、文部科学省の「大学改革推進等補助金」を活用した、災害時地域医療支援教育センターを開設されました。災害医療ロジスティクスを始めとする各種研修や、講義、演習を通じて災害医療体制の発展に尽力しておられます。

研究面におきましても、過日、本協会の拡大理事会開催の折に見学させていただきました医歯薬総合研究所では、デジタル機器として世界初となる7テスラMRIや世界最高速CT装置の世界第一号機が稼働して、すでに国際的な共同研究が進められており、世界に冠たる研究を行っておられます。

私立医科大学は、我が国における医師の約4割を養成す

る教育機関であり、また医学の発展に貢献する研究機関でもあります。学校法人岩手医科大学も、私立医科大学の中心的な学校法人の一つとして、多大な社会貢献を果たしつつ、今日まで堅実な発展を遂げてこられました。このことはひとえに、歴代の理事長・学長・病院長を始め、関係者の皆様、同窓生の皆様のご努力の賜であり、深く敬意を表するものであります。

学校法人岩手医科大学と日本私立医科大学協会の関係は、昭和48年の本協会発足時より続いております。創立当初は篠田紘先生に役員をお引き受けいただき、その後、三田俊定先生、小原喜重郎先生、大堀勉先生と、長年に亘りご指導をいただいております。

そして最近では、理事長の小川彰先生には本協会の総務経営部会担当副会長として、協会運営の中心的役割を担っていただいております。ご多忙にも関わらず、大変なご尽力をいただいておりますことに、この場をお借りし改めて御礼申し上げます。

現在の日本の教育・医療を取り巻く状況は、少子高齢化、

地域医療崩壊、診療報酬改定や消費税問題など、大変厳しいものがあります。このような状況の中、岩手医科大学は小川理事長を中心に素晴らしい経営努力をなされており、確実な成果を積み上げておられます。

このたびの120周年記念事業の一環として建設中である千床規模で高次機能病院の矢巾新附属病院の平成31年竣工を大きなステップとして、内丸の附属病院棟を外来病院「内丸メディカルセンター」として整備し、両病院を一体的に運用して行かれる予定であると伺っております。すべての計画を達成されて、新たなキャンパスで、医療や教育・研究をさらに発展されることを期待したいと思います。

今後も、本協会は岩手医科大学はじめ会員の皆様と共に、私立医科大学の振興を図り、我が国の医学及び医学教育の進歩発展に貢献していきたいと考えておりますので、何卒御協力の程、よろしくお願い申し上げます。

学校法人岩手医科大学が、今後益々ご発展されますことをお祈り申し上げ、創立120周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

記念祝賀会

記念式典終了後、盛岡グランドホテルに会場を移し記念祝賀会が行われました。午後5時、小林誠一郎副学長の開会の挨拶で始まり、大学を代表し祖父江憲治学長が記念式典を無事に挙げてきたことへの感謝と「本学建学以来の根幹である地域に根ざした医療をさらに発展させ、地域から日本、世界に飛躍する大学を引き続き目指してまいります」と今後に向けた決意を述べました。その後、ご来賓の小川秀興医学教育振興財団理事長(学校法人順天堂理事長)、河田悌一日本私立学校振興・共済事業団理事長よりご祝辞を頂きました。続いて行われた鏡開きでは、ご来賓、関係者総勢25

名が登壇し、司会者の掛け声に合わせて会場の招待客も一体となって唱和し盛大な鏡開きとなりました。

齋藤和好岩手医科大学同窓会圭陵会会長による乾杯で祝宴の幕が開き、「森川ともゆきとタンゴ・アンサンブル」による生演奏と本学の歴史120年を振り返るDVDが上映され、リラックスした雰囲気の中、歓談となりました。

盛況の中、最後は、三浦廣行副学長が中締め挨拶を述べ、酒井明夫副学長の閉会の挨拶により記念祝賀会は閉会となりました。



祖父江憲治 学長



小川秀興 医学教育振興財団理事長



河田悌一 日本私立学校振興・共済事業団理事長



鏡開き



乾杯



会場の様子

薬学部白衣授与式が行われました



4月28日(金)、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、薬学部5年生124名を対象とした白衣授与式が行われました。

授与式では、名取薬学部長と高橋実務実習部会長より、5月8日(月)から始まる実務実習にあたっての激励の挨拶があり、保護者や教員が見守る中、学生への白衣の授与が行われました。

また、5年生を代表して古川洋行さんより「建学の精神である誠の人間を目指すとともに、誠心誠意、実務実習に臨みます」と宣誓がありました。

ふれあい看護体験が行われました



5月11日(木)、本学附属病院において「ふれあい看護体験」が行われました。この体験は、ナイチンゲールの誕生日である5月12日が「看護の日」に制定され、その日を含む日曜日から土曜日までを「看護週間」としていることから、様々な施設でふれあい看護体験が実施されており、本院でも平成4年から毎年実施しています。

看護の道を志す生徒の増加を背景に、今年は県内の高校生59名が参加し、実際のユニフォームに袖を通すと緊張した面持ちで体験に臨みました。

生徒たちは、鈴木副病院長、三浦看護部長から挨拶を受けた後、それぞれの体験場所となる病棟へ移動し、患者さんの搬送や誘導、清潔面の援助、患者さんとのコミュニケーションなどを行いました。



体験終了後、参加した生徒からは、「患者さんの足を洗い『ありがとう』と言われ嬉しかった」「看護には思いやりと優しさが大切であることを実感できた」「看護師になりたい気持ちが強くなった」といった感想が述べられました。また、三浦看護部長より、参加者を代表して佐藤万莉奈さん(釜石高校2年)に修了証が授与されました。

小児病棟で「こいのぼり会」が行われました



5月12日(金)、本学附属病院西5A(小児科)病棟において、「こいのぼり会」が行われました。この会は、入院中の子供たちやその保護者が入院生活を楽しんでもらえるようにと、こどもの日にちなんで毎年5月に病棟スタッフが開催しています。

会では、入院中の青松支援学校の生徒による「ふるさと」の演奏や4月に西5A病棟に配属された看護師によるダンス、そしてゲスト出演のクラウンさんによるパフォーマンスが披露され、楽しいひとときを過ごしました。



学校法人岩手医科大学

平成29年度 事業計画

1. 背景と方針

本学は明治30年（1897）の私立岩手病院医学講習所設置から数え、平成29年（2017）に創立120周年の節目を迎える。これを機に創立者三田俊次郎の掲げた厚生済民の原点に今一度回帰した上で、新時代を担う誠の総合医療の実現と地方にあって世界に発信する大学への飛翔を目指すことを目的とし、創立120周年記念事業の実施を決定した。本事業は、かねてより進めてきた矢巾キャンパスへの附属病院の移転整備、内丸メディカルセンターの整備に加え、学校法人岩手女子奨学会から岩手看護短期大学の経営移管を受け、これを母体とした4年制看護学部を設置を柱とする壮大なプロジェクトである。

記念事業の推進にあたっては、教職員、学生はもとより、卒業生、父兄、関係者、地域の方々の理解と協力が不可欠であることから、本学がこれまで培ってきた信頼の歴史を改めて掘り起こすとともに、現在保有する知の力、医の力を積極的にアピールし、より一層の支援拡大に努めることとする。これまでに記念ロゴマーク・スローガンの公募、記念グッズの制作、記念イベント「健康フェス」実施のほか、大学報や圭陵会報、大学ホームページ、ラッピングバス、広告看板設置等による広報活動を実施し、事業資金確保に向けた募金活動を活発に展開してきたところであり、今後も史料整備事業として歴史資料の収集・整理を行い、周年記念出版物の発刊に向けた編纂作業も進めていく。

病院移転の進捗としては、矢巾新病院へ熱源等を供給するエネルギーセンターを病院建設に先行して整備する

とともに、新病院本体の基本設計及び実施設計を平成28年内に終了させた。また、メディカルセンターを含む内丸地区の再整備に関して、岩手医科大学跡地活用検討懇話会を設置し、岩手県、盛岡市、盛岡商工会議所のみならず医師会、地元企業、町内会等からも広く意見を聴取し、今後の計画に反映させていくこととしている。

平成29年度の本事業としては、岩手看護短期大学を母体とした看護学部を矢巾キャンパスに開設し、医・歯・薬・看護の4学部の学生が同一キャンパスで学ぶ国内に類のない医療系総合大学としての新たな歴史の一步を踏み出す。また、平成31年9月の開院を目指し、新病院の本体建設工事を本格的に開始させるほか、創立120周年記念式典の実施、記念誌の発刊を予定している。

一方、附属病院の移転事業費の削減及び事業資金の調達は困難を極めることから、施工業者からの技術提案や発注方式の見直し等、あらゆるアイデアを駆使して事業費の圧縮を図るとともに、資金捻出のため、平成27年度に発動した附属病院増収プロジェクトをより推進する一方、各種補助金等、外部資金の積極的な獲得に努めつつ、借入金を含めた長期的な資金計画の検討を行いながら、使命とする教育・研究・医療を通じた社会貢献の更なる推進に向けて、強固で安定した財政基盤を確立していくこととする。

以上の方針に基づき、平成29年度は次の重点事業を実施する。

2. 主要な事業計画

1 創立120周年記念事業関係

① 矢巾新附属病院新築工事の推進

② 内丸地区附属病院跡地活用に係る協議推進

2 教育・研究関係

- ① 医師国家試験・歯科医師国家試験・薬剤師国家試験の合格率向上対策
- ② 「ひらめき☆ときめきサイエンス」による小・中・高校生を対象にした薬学の啓発
- ③ 東講義実習棟2階マルチメディア教室備付ノートパソコンの計画的更新（5か年計画）
- ④ 看護学部における設置計画の着実な履行と教育研究活動の推進
- ⑤ 看護学部開設に伴う機器備品の年次的段階整備
- ⑥ 看護学部の図書整備
- ⑦ 就職ミスマッチの回避と内定率向上のための継続的な支援

- ⑧ 全学部における教育改革・授業改革推進事業
- ⑨ 教学IR (Institutional Research: 学生情報一元化収集・解析) 充実化事業
- ⑩ 図書館システムの更新
- ⑪ 和漢古書整理
- ⑫ 学術メールサーバの更新
- ⑬ 岩手看護短期大学の国家試験合格率の高位維持
- ⑭ 岩手看護短期大学図書館の管理運営
- ⑮ 医療専門学校の入学生の確保
- ⑯ 医療専門学校の国家試験合格率の高位維持

3 補助事業及び委託事業関係

- ① 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の推進（継続）
- ② 私立学校施設整備費補助金による透過型電子顕微鏡の整備
- ③ 厚生労働行政推進調査事業費補助金による健康安全・危機管理対策総合研究事業（継続）
- ④ 日本医療研究開発機構委託事業 オーダーメイド医療の実現プログラム（継続）
- ⑤ 日本医療研究開発機構委託事業 認知症研究開発事業（継続）
- ⑥ 岩手県委託事業 災害時実践力強化事業
- ⑦ 岩手県こころのケアセンター運営事業
- ⑧ いわてこどもケアセンター運営事業
- ⑨ 岩手県ドクターヘリ運航事業
- ⑩ 東北メディカル・メガバンク計画

4 医療関係

- ① DPC 制度の内容に沿った施策
- ② 紹介患者と救急患者の増加策の実施と効率的な病床運用（継続）
- ③ 電子カルテシステムの更新（継続）
- ④ 電子カルテ部門システムの更新
- ⑤ 部門システム仮想化基盤の導入
- ⑥ 病院移転計画の推進（継続）
- ⑦ 事業継続計画（BCP）の策定検討
- ⑧ 歯科診療データ分析による医療収入の増収対策

5 管理運営関係

- ① 高濃度 PCB を含む蛍光灯安定器廃棄処分計画（継続）

6 施設設備関係

- ① 1号アパートの解体
- ② 循環器医療センター中央監視装置更新工事
- ③ 花巻温泉病院給湯設備更新工事
- ④ 図書館冷凍機更新工事
- ⑤ 矢巾分館図書落下防止対策（平成26年度からの継続事業）
- ⑥ 緑が丘グラウンド学生クラブ活動施設等整備事業

※掲載内容は、平成29年度事業計画書を抜粋したものです。
詳細は平成29年度事業計画書及び本学ホームページ「情報公開」をご参照ください。



医学部5年生の近藤 有佳さんと峯田 武典さんが 第114回日本内科学会総会の医学生・研修医部門で優秀演題賞を受賞しました

4月15日に東京国際フォーラムで開催された第114回日本内科学会総会において、医学部5年生の近藤 有佳さんと峯田 武典さんが、医学生・研修医部門にて優秀演題賞を受賞しました。内科学会では、「医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ」と題して、医学生および研修医が、内科医としての実力を研鑽する為の発表の機会があります。昨年の医学部4年の研究室配属において、近藤さんは血液腫瘍内科、峯田さんは循環器内科で研究を行いました。その研究成果が、今回の発表演題「血小板減少症の末梢血を用いた鑑別方法の検討」と「ST上昇型急性心筋梗塞の発症から受診までの時間と性差の検討」です。当日は全国の350を越える演題の中から、優秀な演題が表彰されました。特筆すべき事は、受賞者のほとんどが研修医の中で、本学医学部5年生の2名が評価されたことです。本学学生の知性の高さが学外へ示されました。また、両受賞者の指導者に対して優秀指導教官賞が授与されました。表彰式では、我々血液腫瘍内科グループと循環器内科伊藤教授グループで共に祝杯を挙げる事ができました。



(左3人目から) 古和田講師、近藤さん、峯田さん、伊藤教授

(文責：内科学講座血液腫瘍内科学分野 講師 古和田 周吾)

シリーズ 職場めぐり

No.111

臨床検査医学講座

当臨床検査医学講座は、1982年（昭和57年）4月、中央臨床検査部から分離して始まりました。今春で35周年を迎えたこととなります。現在は諏訪部章教授のもと、総勢7名が在籍しており、小所帯で診療・教育・研究に精を出しております。

外来では臨床検査科・総合診療外来として健康診断・受診科振り分け・人間ドック業務に携わっております。健康診断は、従来新規雇い入れや復職など内部の方への対応が多かったのですが、外部からの受診者も増えてきました。当院は院内検査項目が多く、当日朝受診すれば診断書が即日発行できることを病院HPなどで周知に努めた成果と思っております。

検査を通じて全臨床科・部門に直接関わる部署として、中央臨床検査部との連携の元に、より利用しやす

い検査結果を提供できるように腐心しております。縁の下の力持ちとして信頼していただけるように頑張りますので、今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

（助教 小笠原 理恵）



神経科学研究部門

医歯薬総合研究所神経科学研究部門は、祖父江憲治学長のもと、「細胞骨格」に注目した研究に取り組んでいます。細胞骨格はその細胞の形や運動性の制御において中心的な役割をしています。その中でも複雑な形と精密な回路網によって高度な脳機能を担っている神経細胞に注目して研究を進め、これまでに記憶・学習に関わるシナプス形成の制御やストレスに対する神経機能の変化の分子メカニズムなどについて明らかにしています。いまだ多くが未解明である精神・神経疾患の発症や病態の分子メカニズムを明らかにし、予防・治療につなげるべくさらなる研究の発展を目指しています。

他講座とも連携して癌細胞の浸潤・転移、創傷治癒や組織線維化など、細胞形態や運動性が関わる生命現象について多岐にわたる研究を展開しています。教室員は多くありませんが先導的な研究を心掛けて日夜励んでい

ます。研究内容にご興味の方はどうぞお気軽にお越しください。

（講師 真柳 平）



動物研究センター

動物研究センターは昭和33年4月に前身の動物飼育室が設置されてから平成29年で59周年を迎えます。平成27年4月より三部篤教授（薬剤治療学講座教授）がセンター長を務めており、教員（獣医師）1名、技術員7名、補助員3名、事務員1名が常在し、教育・研究支援業務、実験動物の飼育管理業務を行っています。実験動物の飼育については、一定の温湿度維持や照明切り替えなど厳密な環境統御を行い、定期的な微生物モニタリング検査によって飼育中の動物の感染防止と安全性の確認に努めております。さらに、凍結胚・精子の作製および、それらからの個体復元などのサービスを行っております。動物愛護の精神に則り、より優れた麻酔薬、飼育器材、消毒方法の研究も行っております。岩手医科大学における基礎研究を支えるため、スタッフ

一同より一層努力して参りますのでよろしくお願いいたします。

（副センター長 若井 淳）



1. 平成28年度補正予算について
2. 平成29年度事業計画について
3. 平成29年度予算について
4. 附属病院副院長の選任について
附属病院副院長 森野 禎浩 (新任)
(任期 平成29年4月1日から平成31年3月31日まで)
5. 理事の選任について
理事 嶋森 好子 (新任)
(任期 平成29年4月1日から平成30年2月22日まで)
6. 理事の職務担当区分について
7. 教員の人事について
統合基礎講座生理学講座統合生理学分野 教授
中隣 克己 (現 近畿大学医学部生理学講座 講師)
(発令年月日 割愛の状況による)
統合基礎講座解剖学講座人体発生学分野 准教授
木村 英二 (前 同分野 講師)
統合基礎講座法科学講座法歯学・災害口腔医学分野 准教授
熊谷 章子 (前 歯学部口腔顎顔面再建学講座口腔外科学分野 特任講師)

- 医学部内科学講座消化器内科肝臓分野 特任准教授
宮坂 昭生 (前 同分野 講師)
医学部泌尿器科学講座 特任准教授
杉村 淳 (前 同講座 講師)
(発令年月日 平成29年4月1日付)
8. 組織規程の一部改正について
看護学部の開設に伴い看護学部設置準備事務室を矢巾キャンパス教務課に統合するとともに、事務の効率化のため、全学教育推進機構事務室も同教務課に統合すること、また、歯科医師卒後臨床研修業務を実態に合わせ、歯科医療センター事務室の所管とし、これに伴い医師・歯科医師卒後臨床研修センター事務室を医師卒後臨床研修センター事務室に名称変更することとして組織規程別表4を一部改正することについて承認
 9. 教育職員の定員に関する規程の一部改正について
看護学部開設に伴い、同学部に関する事項を追加するため、教育職員の定員に関する規程を一部改正することについて承認
 10. 病院附属施設の建築計画について
 11. 附属花巻温泉病院の取扱いについて

編集委員コーナー NO.18

山ちゃんと菊ちゃんの大学周辺お店めぐり ～隠れた盛岡の名店「串揚げ いずみ」～ presents

今回ご紹介するのは、当院PET・リニアアクセスセンターに程近い、隠れ家的店構えのお店、「串揚げ いずみ」です。平成15年3月に開店後、俳優の辰巳琢郎も来店したことがあり、岩手ビックブルズの選手も常連客のお店です。

野菜やお肉・魚介など20種類以上の食材からオーダーできる串揚げは、きめ細かな衣で包まれ、1本ずつ丁寧に揚げてくれます。特におすすめは、「アスパラガス・カマンベールチーズ・ながいも・ブチトマト」など、揚げたては絶品です。また、豪快に盛られた大根おろしのさっぱり感が美味しい「納豆卵焼き」や他の「おつまみ」もおすすめです。お通しのキャベツと揚げたてが美味しい串揚げは、ビールも進み、翌日の鋭気を養えること間違いなしです。

ノー残業デーに覗いてみてはいかがでしょうか。



「串揚げ いずみ」

電話：090-1379-6320
住所：盛岡市本町通り2-2-8
営業時間：17:00～深0:00
定休日：日曜日、祝日



スポット医学講座

放射線腫瘍学科 特任講師 及川 博文



前立腺癌骨転移の新しい治療

外科的去勢(精巣摘出)、ホルモン療法により男性ホルモン分泌が抑制されているにもかかわらず悪化する前立腺癌のことを「去勢抵抗性前立腺癌」と呼びます。昨年より、骨転移があり、内臓転移を伴わない去勢抵抗性前立腺癌に対して、「塩化ラジウム223」の内用療法^{*1}が国内でも施行できるようになりました。この治療は1人の患者さんに対して4週間ごとに最大6回まで静脈注射で行います。

ラジウム223はカルシウム類似体でアルファ線を放出する核種です。体内では骨代謝が盛んな骨転移巣に集積し、生物学的効果の高いアルファ線によって腫瘍細胞のDNA二重鎖を切断します。アルファ線の飛程は100マイクロメートル(細胞10個分)で、周辺組織に殆ど影響することなく、病変だけに効果的に放射線を照射することが可能です。このため、塩化ラジウム223の内用療法は治療効果が高く、副作用が少ないという利点があります。

この治療は国際共同第Ⅲ相試験で、偽薬^{*2}と比較して全生存期間の延長、痛みや病的骨折、麻痺などの症候性骨関連事象発現までの期間を有意に延長させることが確認されています。主な副作用には悪心、下痢などの消化器症状や血球減少があります。

岩手医大でも塩化ラジウム223内用療法が開始され、これまでに2名の患者さんが治療を受けています。

画像はM1と名付けられた2200年前のミイラです。この男性は51-60歳で、前立腺癌の骨転移の痛みに苦しみながら亡くなっていったと推定されています。



^{ないようりょうほう}
※1 内用療法…放射性同位元素を組み込んだ薬剤を経口的あるいは経静脈的に投与し、標的臓器や標的悪性腫瘍に対して体内での放射線照射により治療効果をもたらす放射線治療。

^{まやく}
※2 偽薬…本来治療効果を持たない(有効成分を含んでいない)薬。主に治験(臨床試験)において、開発中の薬の有効性を調べる際に使用される。

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	山尾 寿子
影山 雄太	菊池 初子
松政 正俊	米澤 裕司
齋野 朝幸	熊谷 佑子
藤本 康之	安保 淳一
白石 博久	佐々木 忠司
成田 欣弥	畠山 正充
遊田 由希子	菅原 侑子
佐藤 仁	武藤 千恵子
小坂 未来	高橋 慶
藤澤 美穂	

編集後記

今号で特集したように、この春、本学の120周年記念式典が盛大に挙行されました。私も出席しましたが、式典の中で、私の知らなかった本学の歴史や偉大な業績のお話があり、とてもよい勉強の機会になりました。

現在、120年の歴史の中でもとても大きな事業となる矢巾移転事業が進行しています。その進捗については大学報でもお知らせしていくと思いますが、職員や学生にとってよい歴史になることを心から願います。

(編集委員 成田 欣弥)

岩手医科大学報 第488号

発行年月日 平成29年5月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@jwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp